

## 六朝の文学用語に関する一考察<sup>(1)</sup>

——「沈思翰藻」をめぐって——

福井佳夫

### 一、「沈思翰藻」の典故

若其「讚論之綜緝辞采、事出於沈思、故与夫篇什、雜而集之。

「序述之錯比文華、義歸乎翰藻。」

史書のなかの讚と論は辞藻をあつめ、序と述は文飾をまじえたものだ。それらの文章たるや、内容はふかい思索から出発し、表現は華麗な美文に帰着している。されば、「詩賦などの」文学作品とならべて、これらの文章も採録してよからう。

これは、梁の蕭統<sup>しょうとう</sup>こと昭明太子の手になる、「文選序」の一節である。「文選」は旧時の詩文アンソロジーとして、たかい権威を有するが、じつは最古のものではない。それ以前にも摯虞<sup>しよ</sup>『文章流別集』などが編纂されて

いたのだが、それら先行する詩文集が亡佚してしまつたため、結果的に現存最古の詩文選集として、敬意を払われていたのである。その『文選』の序文のなかで、蕭統はいかなる作を採録し、いかなる作を採録せぬかを説明している。右の一節は、讚論や序述のジャンルを採録した事情をかたつた部分だ。これらの文章はふつつ、「詩文の仲間でなく」歴史書の一部だと意識されている。そうした文章を例外的に採録したので、かくその理由を説明したのである。

この序で蕭統はいう。「文選」は儒教の經典や諸子百家の書は採録しない。さらに、遊説家や策士の弁論、歴史関連の書も、詩文の仲間でないから採録しない、と。それら思想や史書の類は「立意」（主張をのべる）や「褒貶是非」（よしあしを褒貶する）が主であり、「能文」（文章をかざる）を重視していかないから、というのがその理由である。つまり蕭統によれば、「立意」などが主の著作は文学ではないのだ。ただし例外がある。それが史書中の讚・論と序・述のジャンルだとして、以下で右の「若其讚論」云々の六句をつづけたのだった。蕭統はいう。讚・論と序・述の文章は「内容はふかい思索から出発し、表現は華麗な美文に帰着している。されば、「詩賦などの」文学作品とならべて、これらの文章も本書に採録してよかる」と。これによると、讚論の類は「沈思」であり「翰藻」であるから、『文選』に採録してもよい、ということらしい。ということとは、「沈思」と「翰藻」を有するものが文学に属する、ということになろう。<sup>2)</sup>

この二句はもとは、讚論と序述をなぜ『文選』に採録したのかを、説明したものにすぎなかった。しかし、右のような文脈からすれば、「沈思」と「翰藻」こそ『文選』の選録基準そのものであり、ひいては「文学」なるものの条件ということになる。この蕭統の発言は、後世の文学批評におおきな影響をあたえることになった。というのは、中国ではこれ以前、「詩は志をいう」とか「文章は経国の大業なり」とかの主張はなされていた。し

かし、「これは文学に属する」「あれは文学に属さない」などの発言はなく、文学とはなにをさすのかが、あいまいなままだったのである。

もつとも、『文選』以前の『文章流別集』『の残存資料』などをみると、儒教の經典や諸子百家の書を文学から除外するのは、当時でも共通認識だったようだ。だが、「では、史記の項羽本紀や賈誼の過秦論は文学なのか」とたずねれば、当時の人びと「だけでなく、現在の我われ」でも、うーんとかんがえこんだことだろう。そうしたところへ、蕭統ははじめて文学と非文学との弁別法を提示し、両者のあいだにはつきり境界線をひいたのだった。すなわち、「沈思と翰藻を兼備していれば文学、そうでなければ非文学である」と。

近代になって、本格的な文学批評の研究が開始されるや、この「文選序」中の「事出於」二句が、批評史上でとくに注目されるようになってきた。この二句への注意を喚起したのは、おそらく清代の阮元「書梁昭明太子文選序後」（*學經室三集*）が最初だったろう。しばしば引用される有名なものだが、近代における『文選』および「文選序」研究の狼煙をあげた文献なので、關鍵部分を揭示しておこう。

昭明所選名之曰文。蓋必文而後選也、非文則不選也。經也子也史也、皆不可專名之為文也。故昭明文選序後三段特明其不選之故。必沈思翰藻始名之為文、始以入選也。

昭明太子が編纂した『文選』には、「書名」に「文」とある。おもつに、「文」を必須条件として作品を選録し、そうでなければ選録しなかったからだろう。「経」「子」「史」などの類は、すべて「文」と称することはできぬ。だから太子は「文選序」の第三段で、それらを選録せぬ理由を明言しているのだ。「沈思」にして「翰藻」であってはじめて「文」といえ、それでこそ『文選』に採録できるのである。

この阮元以後、近代でこの二句に着目して議論をおこなったものとして、朱自清「文選序事出於沈思義歸乎翰

藻説」（『朱自清古典文学論文集』所収）があり、日本でも小尾郊一「昭明太子の文選序」（『真実と虚構 六朝文学』所収）や清水凱夫「文選編纂の目的と選録規準」（『新文選学』所収）などが、各様の関心や立場から、さまざまな見解を開陳されている。とくに清水論文は「沈思翰藻」の研究史にも、詳細な記述をほどこされているので、本稿では二番煎じの研究史紹介は省略することにしよう。

ところが、この清水論文以後、この方面に関しては、あまり研究が進展していないようだ。近時、とくに中国で「文選」研究が隆盛の一途をたどり、おおくの研究が公表されているが、この「沈思翰藻」に関したものはとぼしいといわざるをえない。もちろん論文のなかで、この語に言及することはあるのだが、それは関連でちよつとふれてみたという程度であり、「沈思翰藻」それ自体にテーマを限定したものは、ほとんどかかれていないといつてよい<sup>13</sup>。

というのも、「沈思翰藻」の意味については、現在ではおおむね決着がついているからだろう。論者によって多少の相違はあるにしても、「沈思」はふかい思索、「翰藻」は華麗な美文（あるいは華麗な文飾）ということと、ほぼ意見の一致をみている。ただそうはいっても、さらに細部にわけいて、「ふかい思索」とはどんな思索なのか、「華麗な美文」の内実はどうなのかなどと追究していけば、いろんな見解の相違がでてくるにはちがいない。じつさい、清水氏は右の御論で、「沈思翰藻」の具体的な内容を、なお究明すべきだと強調されている（同書二五〇頁）。

しかしそうした究明は、なかなか困難だろう。かりに我われが「文選序」を執筆した蕭統に対して、「ふかい思索」とはどんな思索をいうのか、「華麗な美文」とはどんな文辞をさすのかとたずねたとしても、おそらく明確な返答はかえってこないだろう。このあたりは、蕭統の頭のなかでもボンヤリしていたのではないか。それゆ

え、文人たちが文学を創作するにあたって、深甚かつ多様な思念をこらすことを「沈思」といい、その「沈思」を修辞ゆたかに表現したものを「翰藻」と表現した——ぐらいの理解でよく、またそれがもつとも実際にちがいのではないかと私はおもつ。

いっぽう、この「沈思」「翰藻」両語の典拠、つまり蕭統がいかなる前例を脳裏につかべ、この語を「文選序」中に布置したかについては、これまでいろいろな指摘がなされてきた（後述）。この「沈思」「翰藻」の両語、いずれも「文選序」が初出ではなく、以前でも使用されてきたものだ。つまり、蕭統はみずから造語したわけではなく、以前から使用されていた語を、ここでつかうのにふさわしいとおもって使用したわけである。くわえて「沈思」については、「妙想」「深念」「熟慮」などの類語があり、「翰藻」についても、「麗筆」「清詞」「綺語」などの類似の語がある。そうしたなか、蕭統はどうしてこの両語を選択し、対置したのだろうか。このあたりは、いわゆる出典しらべや創作心理に属するものであり、我われでもわからぬなりに、なんとか推測してゆけそうだ。

本稿は、蕭統の創作心理にふみこみ、あまたの使用可能なことばがあるなかで、なぜ「沈思」「翰藻」の語をえらんだのか。そして両語をえらんださい、いかなる用例を脳裏につかべていたのか——などについてかんがえてみようとするものである。

## 二、下蘭「賛述太子賦」

結論をさきにいうと、私は、蕭統が「文選序」をつづったとき、魏の下蘭へんしんの「賛述太子賦」（太子を賛述せし賦）の行文を脳裏につかべていた。だからその関係で、「沈思」「翰藻」の両語をえらんでしまったのではないか

——とかんがえる。まずは蕭統が脳裏に浮かべていたとおぼしき、卞蘭「賛述太子賦」の箇所を引用しよう。それは、つぎのような部分である。

伏惟太子、

「研精典籍 覽照幽微、才不世出。」

「稟聰觀之絶性、慈孝発于自然、是以」

「武夫懷恩、文士歸徳、

窃見所作典論及諸賦頌、逸句爛然。

「沈思泉涌、聽之忘味、奉読無倦。」

正使聖人復存、猶称善不暇、所不能聞也。

私が太子さま（曹丕）のことをおもいますに、ふかく古典をきわめ、文学にも関心をお持ちです。字句の内奥までよみとる炯眼は、不世出のものです。聡明な令質にめぐまれ、明達な風格をおもちです。そのうえ慈孝ぶりは自然ににじみで、恵みぶかさは天下におよんでいます。ですから武人は太子さまの恩情に感謝し、文人もご人徳に帰依しているのです。太子さまのお手になる「典論」や賦頌の作を拝読いたしますに、秀逸な語句がかがやいておられます。ふかい思索は泉のようにわき、華麗な文藻が雲のようにあつまっています。これらの文を耳で聞いては恍然となり、拝読してはあきることがありません。もし聖人が出現したとしても、やはり手ばなしで称賛するだけで、批判できぬことでしょう。

いささか多めに引用してみた。ここで注目したいのは、もちろん「沈思泉涌、華藻雲浮、聽之忘味、奉読無倦」四句である。ここの「沈思泉涌、華藻雲浮」は、「文選序」の「事出於沈思、義歸乎翰藻」とよく似ている。対偶中で「沈思」と「華藻」とを対にするのも、「文選序」とそっくりである。ただ「翰藻」を「華藻」にかえているが、これは、当時の文人たちに普遍的だった「文章をいいかげんな気持ちでつくっていないという意気込み」

(孫徳謙『六朝麗指』第三節)を、蕭統も共有していたからだろう。つまり、あえて一字をかえることで、自分なりの創意をしめしたのである。

さらに字句の相似にこだわったならば、卞蘭賦中の「沈思泉涌」の「泉涌」は、「文選序」でも「氷積泉涌」とつかわれていたし、おなじく卞蘭賦中の「聴之忘味、奉読無倦」は、「文選序」の「移晷忘倦」とよく類似している。こうした周辺の字句の類似もかんがえあわせれば、蕭統が魏の卞蘭の賦を意識して、「事出於沈思、義帰乎翰藻」二句をつづったという推測も、納得されてくるのではあるまいか。

この「賛述太子賦」がつくられた周辺事情を説明しておこう。まず作者の卞蘭(生卒年は不明)は、曹丕(一八七～二二六)と姻戚關係を有する人物である。すなわち、曹丕の母であった卞后(つまり曹操の妻)の弟を卞秉といい、その卞秉の息子がこの卞蘭なのだ。そうした關係からだろう、卞蘭は従兄弟である曹丕をたたえた賦作品をつづったのである。標題に「太子」とあるので、この賦は曹丕が太子(このときはまだ漢王朝)したがって曹丕は魏王の太子であって、魏王朝の太子ではない)だったときの作、すなわち二一七～二二二(建安二十二年～延康元年。曹丕三十一歳～三十六歳)のあいだにつくられたのだと推測される。

さて、この「賛述太子賦」の内容は、一言でいえば、「力を極めて曹丕の才華と功德とを称頌したもので、頗る諛詞が多い」という評言につきよう(『中国文学家辞典(古代第一分冊)』四川人民出版社 一九八〇 一三六頁)。「じっさい、この賦、いくら『後漢王朝の』丞相曹操の息子だといっても、その称賛、ぶりは大仰にすぎる」といってよい。この卞蘭賦は右の引用のあとも、つぎのような手ばなしの賛仰の字句(諛辞といつてよからう)がつづくのである。

昔舜以蒸蒸顯其德、周旦不驕成其名。豈因南面之尊以発称、仮鼎足之盛以取誉哉。夫至尊至貴、能令人畏、

不能令人嘗。故桀不能變龍逢之心、紂不能易三仁之意。懷近服遠、非德無施。

むかし舜は孝行ぶりでの徳望ぶりを發揮し、周公旦は尊大にならず名声を樹立しました。彼らは、玉座にすわるがゆえに稱賛されたのでなく、たかき三公の地位ゆえに名声をたもったのでもありません。至尊の地位だけでは、ひとに畏怖の気もちをもたせることはできても、稱賛の気もちをおこさせることはできません。ですから、あの桀王でも忠義な龍逢を變節できませんでしたし、紂王でも賢人の三仁（微子啓、箕子、比干）の心をかえることはできませんでした。ちかくの者をなつかせ、とおくの者を服させるには、徳がなくては不可能なのです。

いうところは、曹丕は聖人の舜や周公旦と同等の仁徳をもっている、ということだろう。最高の褒めことばである。このように下蘭賦は曹丕の徳望をたたえ、才腕を稱賛したもので、まさに「太子を賛述せし賦」という標題にふさわしい作だ。この賦がつくられた直後に（たぶん）即位して、魏の文帝となった曹丕は伶俐な人物であり、けつしておるかではない。この賦の内容が実態をはなれた過褒であることは、曹丕もよくわかっていただろう。この賦をささげられたときの曹丕の反応がのこっている。すなわち曹丕は、「吾下蘭教」という「教」（詔勅の一種）をくだし、つぎのようにのべたという。

賦者、言事類之所附也、頌者、美盛徳之形容也、故作者不虛其辭、受者必當其美。蘭此賦、豈吾美哉。昔吾丘壽王一陳宝鼎、何武等徒以歌頌、猶受金帛之賜。蘭事雖不諒、義足嘉也。今賜牛一頭。

賦とは、主題に関連した事がらを叙するものだし、頌とは、盛徳ぶりを稱賛するものだ。それゆえ作者は浮辞をつらねてはならず、受納する者は賦頌にふさわしい実体をもたねばならぬ。下蘭の賦は、余の実体を叙したものとえようか。ただ、むかし吾丘壽王は鼎について過褒の言をのべ、何武らも大仰な頌歌を

うたったのだが、それでも黄金や絹を下賜されている。下蘭の賦の内容は「称賛しすぎで」納得できぬが、それをつづる意義はよみしてよい。いま牛一頭をあたえることにしよう。

ここで曹丕は、漢武帝のときの吾丘壽王の話柄と、漢宣帝のときの何武の話柄とを引用している。この二条の話柄、ともに溢美の言を主君にささげることによって、臣下が恩賞をえた故事である。これらの故事を引用したということは、曹丕そのひとは、下蘭賦がそれと同種の過褒の文だと認識していたことをしめしていよう。ただ同時に、儒教の文学的伝統においては、天子やその治道に対し美刺の文（ここでは、もちろん「美」ほめるのほうである）を献納するのは、文人の正当な責務であって、非難されるべきことではなかった。そこで曹丕は、いささかむずがゆい思いをしながらも、「下蘭の賦の内容は「称賛しすぎで」納得できぬが、それをつづる意義はよみしてよい」といったのだろう。

右のとき内容の下蘭「賛述太子賦」が、「文選序」の「沈思」「翰藻」の典故だろうと、私はかんがえている。字句がよく似ているのが、まずはその理由だ。もっとも、この両語の典故に関しては、これまでもいくつかの提案があり、また指摘がなされてきている。代表的なものを二つほど紹介しておこう。

まず小尾郊一氏は右の御論のなかで、「沈思」については陸機「文賦」の  
其始也、皆收视反聽、耽思傍訊。

構想をねる当初は、外界から目をそらし耳もとをさして、ひたすら考えをふかめ想念をめぐらさねばならぬ。ヒントをえたのだからとし、「翰藻」については張衡「歸田賦」の

揮翰墨以奮藻、陳三皇之軌模。

筆墨をふるって美文をつづり、三皇がさだめた大法を叙する。

に由来するのだろうか」と推測された。また清水凱夫氏は、「翰藻」については、小尾氏とおなじく張衡「歸田賦」の用例にもとづいた造語だろうとされるが（「翰藻」の語は、王粲「硯銘」や陸雲「寒蟬賦」注<sup>5</sup>参照）に用例があり、蕭統の造語ではない）、いっぽう「沈思」については、劉歆「与揚雄求方言書」の  
非子雲澹雅之才、沈鬱之思、不能經年銳積、以成此書。

子雲（揚雄）の淡雅な才能や沈鬱な思慮がなかったならば、何年努力をつみかさねても、この「方言」を完成することはできなかっただろう。

や、これに依拠した任昉「王文憲集序」の、

若乃……沈鬱澹雅之思、離堅合異之談、莫不總制清衷、逶為心極。

……や沈鬱にして淡雅な思慮でかかれた書物、堅白異同の談論などの類は、すべて頭脳をしばってかかれ、知力をつくして案出されたものばかりだ。

からみちびきだされたのではないか、と主張されていた（「沈思」の用例は漢代から散見する）。

こうした指摘は、たしかに「文選序」の用法にちかい意味を有した用例ではあろう。ただ、「これがまぢが  
いなく典拠だ」「これではなくてはならぬ」と断じられるほど、つよい証拠能力にはとほしいように感じられる。

「これが典拠だ」というより、「こうした有力な用例がある」という程度ではあるまいか。

そつした点では、私があげた下蘭賦の用例も、おなじレベルのものにすぎない。ただすこし有力だとおもつのは、「沈思」「華藻」が単独でなく対偶中で対置されていること、および詩文を評価する文脈のなかで使用されていること——「二点で、「文選序」での使いかたに「面氏」指摘の用例より」似ていることだろうか。

## 三、蕭統の曹丕比擬

しかし、私が下蘭賦を典拠だとかんがえるのは、ただ字句が類似しているからだけではない。ほかに重要な決め手がある。それは、蕭統と曹丕とのふかい関係である。そしてその二人を関係づけるのが、この下蘭「賛述太子賦」なのである。以下、そのことを順をおってのべてゆこう。

まず、事実として蕭統は、「『賛述太子賦』でたたえられる」魏の曹丕とおなじ好文の太子であった。それゆえ当時、両者の相似がよく意識されていたらしい。というのは、同母弟の蕭綱（梁の簡文帝。蕭統が急死したあと、兄のあとをついで太子となった）に関連して、つぎのようなエピソードがのこっているからだ。

太宗幼而敏睿、識悟過人。六歲便屬文、高祖驚其早就、弗之信也。乃於御前面試、辞采甚美。高祖歎曰、「此子吾家之東阿。」（『梁書』簡文帝本紀）

太宗（蕭綱）は幼少のころから俊敏で、その賢明さはぬきんでていた。六歳でもう詩文をつくったので、高祖（武帝）はその早熟ぶりにおどろき、自作だとは信じなかった。そこで、ためにに面前でつくらせたところ、すばらしい出来ばえだった。高祖は感嘆して、「この子は、わが蕭家の東阿（曹植）であるなあ」といった。

これは蕭統の弟の蕭綱が、幼時からすばらしい詩文の才を発揮したという話である。周知のように、曹植は六朝にあつては、最高の詩人として尊崇をつけていた。梁武帝が蕭綱をその曹植に比擬したのは、蕭綱が幼にして卓抜な文才を発揮していたことをものがたつていよう。だがこの逸話は同時に、武帝が日ごろから兄の蕭統を、

曹丕になぞらえていた事実も暗示するのではないか。だからこそ武帝はおさない蕭綱を、曹植に比擬したのでろう。つまりこの話は、文才すぐれし蕭統蕭綱の兄弟を魏の曹丕曹植兄弟に擬しがちであった話柄としても、理解できるのである。

梁代の中期ころになると、三曹などの建安文学は理想視されるようになり、彼らの詩文や言動はおおくの文人たちによって、さかんに典拠として利用されるにいたった。そうした文学風潮のなか、蕭統蕭綱と曹丕曹植とは、偉大なる英主（曹操と蕭衍）のもとで成長した好文の兄弟という類似点があり、どうしても比擬されやすかったにちがいない。そうした事情が、右のようなエピソードをうんだのだろう。

この推測をおぎなう資料として、当時の文人たちがつづつた詩文（蕭兄弟を叙するのに、曹兄弟の典故を使用した詩文）があげられる。ただそうした詩文については、すでにこれまで何度か指摘してきたので、ここではまさに卞蘭「賛述太子賦」を利用して、蕭統と曹丕を関連づけた資料をあげてみよう。それは、蕭統の側近だった劉孝綽の「昭明太子集序」である。

『梁書』劉孝綽伝によると、梁の普通三年（五二二）、蕭統二十二歳のとき、この時期までに蕭統がかきあげた詩文の類が、けっこうな分量になった。そこで臣下の文人たちはみな、それを一書に編纂したがった。そのとき蕭統は、劉孝綽ひとりに自分の詩文の編纂をゆだね、さらにその序文もかかせたのだった。蕭統はこのとき、前途洋々たる皇太子である。孝綽はさぞかし、鼻たかだかだったことだろう。かくして劉孝綽は太子の集を編し、序文「昭明太子集序」を執筆したのだが、その序文中につきのような一節がある。

仮使王朗報箋、卞蘭獻頌、猶不足以揄揚著述、称賛才章。況在庸臣、曾何彷彿。

かりに王朗に「与許文休書」をかかせ、卞蘭に「賛述太子賦」を献じさせたとしても、太子さま（蕭統）

の詩文をほめたたえ、才腕を称賛しきれないでしょう。ましておろかな臣（孝綽）ごときが、詩文の真価を髣髴させることができませんようか。

ここで傍点を付した箇所注目しよう。劉孝綽は蕭統の詩文の才をたたえるのに、魏の王朗「与許文休書」（この書簡でも、曹丕をめぐみぶかい人物として称賛している）とともに、卞蘭の賦を引用している。ここでは、「与許文休書」や「贊述太子賦」は、いわば曹丕と蕭統とをつなげる役わりをはたしているのに注意しよう。このことは当時、曹丕の文才をたたえた卞蘭「贊述太子賦」は、蕭統の文才をたたえる典故になっていたことをものがたっている。だから孝綽は、卞蘭賦をここにつかっただ。すると、この種の典拠利用がなされる前提として、蕭統を曹丕（＝文才すぐれし太子）に比擬する風潮があったことが推測されてこよう。

こうした状況のもと、蕭統本人も、曹丕との相似を自覚していたようだ。蕭統も自分の詩文のなかで、しばしばおのれを曹丕に比擬しているからである。たとえば、蕭統の「答湘東王求文集及詩苑英華書」という書簡をみてみよう。どうやら、右の蕭統の集が完成した直後、弟の蕭繹（このときは湘東王）が書簡をおくって、完成した兄の集と兄編の『詩苑英華』とをほしがってきたようだ。蕭統はそうした弟にむけて、この返書「答湘東王求文集及詩苑英華書」をつづつたのだが、そのなかにつぎのような一節がある。

或「夏條可結、倦於邑而厲詞。……」 不如子晋、而事似洛濱之遊、濠舟玄圃、必集阮之儔、  
冬雲千里、親紛罪而興詠。……」 多愧子桓、而興同漳川之賞、徐輪博望、亦招龍淵之侶。

校數仁義、旨酒盈疊、曜靈既隱、繼之以朗月、並命連篇、在茲弥博。  
源本山川、嘉肴溢俎、高春既夕、申之以清夜。

夏の樹枝がむすべるほどのびるや、憂いごとにもあきて詩をつづり、冬の雲が千里にひろがるや、そのと

ぶさまをみて吟詠する。……子晋（王子喬）にはおよばぬが、楽しみは子晋が洛濱であそんだ話に似ているし、子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水であそんだ故事とおなじなのだ。舟を玄圃園にうかべて、心瑒や阮瑀のごとき人物をあつめ、車を博望苑にすませて、龍淵（宝剣）のごとき土をまねきよせる。そして、仁義を論じ、山川を「詩文をつくる」源とし、美酒は樽にみち、馳走は台にあふれている。日がしずんで明月があたり、夕方になって夜ともなると、詩文をつくるよう命じて、かくしてこの文集も作品数がふえてきたわけだ。

ここで蕭統は、四季のうつろいに感興をもよおして、詩文をつづるのだと叙したあと、「子桓（曹丕）には気がひけるが、興趣は子桓らが漳水であそんだ故事とおなじ」（不如子晋、而事似洛濱之遊）とのべているのに注目したい。ここでいう「漳川」とは、南皮の近郊をながれる河川の名であり、婉曲に南皮の地をさしている。つまり、蕭統は四季の変化に興味を感じて詩文をつづりながら、「子桓」つまり曹丕の「南皮之遊」（「与朝歌令吳質書」中の字句）を想起しているのである。このときの蕭統の心理を推測すれば、自分も曹丕と同格「の皇太子」だからというのでなく、いわばあこがれの文人（曹丕）へのオマージュを、こういうかたちで表現してみた、ということではないかとおもふ。

そうした曹丕との相関を意識して、この蕭統書簡をみてみると、たとえば「心瑒や阮瑀のごとき人物をあつめ」（必集心阮之儔）とある心瑒と阮瑀も、曹丕とゆかりある建安の文人だし、また「日がしずんで明月があたり、夕方になって夜ともなる」（曜靈既隱、繼之以朗月、高春既夕、申之以清夜）も、曹丕「与朝歌令吳質書」の「白日既匿、繼以朗月」（白日がかくれ、明月がでてくる、の意）あたりを意識していた可能性は、じゅうぶんかんがえられよう。

このほか、蕭統は「宴蘭思旧詩」「鍾山解講詩」「餞庾中容詩」などの篇でも、曹丕に関連した字句や典故を利用している。ここではもう一篇、やはり弟の蕭綱にあてた「与晋安王綱令」をあげてみよう。大通元年（五一八）蕭統二十七歳のとき、太子側近の明北賓と到洽があいついで死去した。そこで蕭統は弟の蕭綱にむけて、「明北賓と到長史、遂に相係いで凋落せり。傷怛し悲惋して、已む能わざるのみ」云々と開始される「与晋安王綱令」をかきおくったのである（蕭統の急逝も四年後にせまっていた）。その令のなかに、右のような一節がある。

談対如昨、音言在耳。零落相仍、皆成異物。每一念至、何時可言。

彼らとかりあつたのはつい昨日のようで、まだその話し声も耳にのこっている。それなのにあいついで逝去し、あの世の存在となつてしまった。このことを想起するたび、いつおまえにこの悲しみをうつたえられるかとおもつのだ。

この一節は、曹丕「与朝歌令吳質書」の「元瑜長逝、化為異物。每一念至、何時可言」（阮瑀は逝去し、鬼籍のひとになつてしまった。このことを想起するたび、いつ貴殿にこの悲しみをうつたえられるかとおもつのだ、の意）をふまえたものだ。この部分は、曹丕がやはり側近の阮瑀をうしなつたときにつづつたものである。終わり三句など、蕭統がそっくり曹丕書簡を模しているのがわかる。

#### 四、蕭綱の曹丕比擬

ついでながら、蕭綱の曹丕比擬にもふれておこう。兄の蕭統が中大通三年（五三一）の四月に三十一歳で急逝するや、蕭綱は同年七月に皇太子の地位をついだ。このとき綱、二十九歳。彼は兄の曹丕比擬をしつていたので、

こんどは自分が曹丕になる番だとおもったのだろう。その場合、曹植はもちろん弟の蕭繹（このとき湘東王だった。歳は二十四）ということになる。都合のいいことに、蕭繹も文才にすぐれていたので、「蕭統」曹丕、蕭綱「曹植」から「蕭綱」曹丕、蕭繹「曹植」への移行は、わりとスムーズにいったようである。

この比擬の移行は、どうやら蕭綱自身が率先しておこなったようだ。というのは、蕭統の急逝、自分の立太子というあわただしい状況のなか、太子となって三、四か月後の十月末か十一月ごろに、蕭綱はさっそく弟の蕭繹に書簡文「与湘東王書」をおくって、つぎのようにかたっているからである。

文章未墜、必有英絶。領袖之者、非弟而誰。每欲論之、無可与語。思吾子建、一共商榷。

このように文学の道はまだほろびず、世にはきつと俊英がひそんでいるはずだ。そうした連中を指導する者は、弟のおまえをおいてだれがしようか。こうしたことを議論したいのだが、いい機会がない。私はわが子建（曹植）をおもっては、ともに文学を批評してみたくてならんのだ。

この引用は、書簡文の末尾の部分である。これよりまえの箇所では、蕭綱は都の建康の詩風が墮落していると、つよく批判している。その批判をふまえたうえで、蕭繹にむかって、墮落した文風を再興させるのは、弟のおまえ以外にはないとよびかけているのが、この「文章未墜」云々の八句なのである。ここで、蕭綱は弟にむかって、「吾が子建（曹植のあざな）」とよびかけているのに注意しよう。ということは、自分はとうぜん「曹植の兄の」曹丕ということになる。つまり蕭綱は、みずから曹丕なりと自任、いや宣言しているのである。

さらに、この「与湘東王書」から三年後の中大通六年（五三四）、蕭綱は類書『法宝聯璧』三百巻を完成させたが、このとき当時の人びとは、同書を「以て『魏の』王象・劉邵らの『皇覽』に比したという（『南史』陸泉伝）。この魏の『皇覽』なる書物は、曹丕が王象や劉邵に命じて編纂させた類書のことである。このエピソード

ド、たんに『法宝聯璧』が『皇覽』に似ていたから比せられたのか、蕭綱の曹丕比擬が定着していたから、『法宝聯璧』が『皇覽』に比せられたのか、そのあたりの詳細はさだかではない。だが、いずれにせよ中大通六年ころには、蕭綱のもくろみどおり、『蕭綱＝曹丕』イメージは世間に定着していたとかがえてよかる。

ここで注目したいのは、当時の詩文が、太子になった蕭綱にむけ、やはり下蘭「贊述太子賦」を典拠につかっていることだ。まずは、蕭綱が自分で下蘭賦に言及している。彼は自分の立太子にさいし、武帝に御礼の「謝立為皇太子表」をささげた。そのなかで、蕭綱はさつそく

將何以著三善之德、延四皓之遊、屈叔譽之辭、繹下蘭之頌。

私はいつたいどうやって「皇太子として」一事で三善をなす徳を有し、「漢高祖の太子のように」四皓をまねきよせ、また「周の太子晋のように」叔譽の発言をおさえ、「魏の曹丕のように」下蘭の頌辞をつづけさせればよいでしょうか。

とのべ、みずから下蘭の賦のことに言及している（『芸文類聚』巻十六）。さらに右の『法宝聯璧』が完成したとき、蕭綱から序文をかくよう命じられた蕭繹は、その『法宝聯璧序』にやはり下蘭賦を引用して、

我副君業邁宣尼、道高啓筮之作、声超姬莢、寧假下蘭之頌。

わが副君（蕭綱）たるや、功業は宣尼よりすぐれ、その道は易の啓筮よりたかいし、また声譽は周武王をこえ、それは下蘭の頌辞をかりるまでもないほどです。

と叙している（『弘明集』巻二〇）。

こうした下蘭賦への言及は当時、「太子（かつては蕭統、いまは蕭綱）について叙するときには、曹丕に比擬したほうがよく、そのためには下蘭賦に言及するのが好都合だ」という共通認識が存していたからだろう。聖天

子とくれば、きまって堯舜の話題がもちだされ、美人とくれば、つねに西施や洛神の名があがるというふうに、当時では好文の太子とくれば、魏の曹丕（ほかに、後漢の劉莊のちの明帝や東晋の司馬紹のちの明帝など）が言あげされやすかった。そうしたさい、卞蘭賦はいわば、好文の太子（曹丕）をみちびきだすための、枕詞として有用だったのである。

ただ、おなじ兄弟で太子だといっても、蕭統と蕭綱のあいだでは、その曹丕イメージがすこしちがっていたようだ。まず蕭兄弟に共通しているのは、文学の侍従（建安七子）と風雅な詩会をたのしむ曹丕像と、その侍従の逝去をいたむ曹丕像である。蕭統の例はすでにあげたので、ここでは蕭綱の例をあげよう。すると、つぎにしめす蕭綱「与劉孝儀令悼劉遵」の文章は、その両方の像を兼備したものと見えよう。

良辰美景、清風月夜、鷓舟乍動、朱鷺徐鳴、未嘗一日而不追隨、一時而不会遇。洒闌耳熱、言志賦詩、校覆忠賢、推揚文史。益者三友、此美其人。……吾昨欲為誌銘、並為撰集。吾之劣薄、其生也不能揄揚吹獻、使得聘其才用。今者為銘為集、何益既往。故為痛惜之情、不能已已耳。（『梁書』卷四十一劉孺伝）

良辰と美景、そして清風と月光のもと、鷓舟げしゅうがすすむや、朱鷺が鳴き声をたてる。こうしたとき、劉遵は一日も私のそばにおらぬことはなく、一時も顔をみないことはなかった。やがて酒たけなわとなり耳がほてってくるや、私たちは志をのべて詩をつづり、また古今の忠賢を論じ、文史を検討したものだ。古言に益者三友というが、まさに劉遵がそのひとだった。……私は昨日、劉遵の墓誌銘をつづり、その文集をつくるつとおもいたった。私はおろかなことに、劉遵の生前に名声をあげさせてやれず、その才能を發揮する機会もつくってやれなかつた。死んだいまごろになって、墓誌銘や文集をつくったとて、死者になんの益になるうか。だからこうして痛惜の情をいだき、とどめることができぬのじゃ。

「この「良辰美景」云々は、文学の侍従（ここでは劉遵）と風雅な詩会をたのしむ場面であり、また「吾昨欲為誌銘」は、その侍従が逝去してかなしむ場面である。こうした場面は、「与呉質書」「与朝歌令呉質書」中に於ける曹丕像とよく合致するものである。

さて、蕭統における曹丕イメージは、ほぼこの二つの場面（風雅な詩会をたのしむ場面、侍従の逝去をいたむ場面）に終始していた。それはいわば、温雅な太子としての曹丕像である。いっぽう蕭綱においては、これにくわえて文壇指導者のイメージも存していたようだ。それは、右の「与湘東王書」で曹丕を自任した蕭綱が、弟の蕭繹にむかつて「このように文学の道はまだほろびず、世にはきつと俊英がひそんでいるはずだ。そうした連中を指導する者は、弟のおまえをおいてだれがいようか」と、文壇改革への協力をよびかけている場面が、それに該当する。しかもこの書簡、それだけでおわらず、つぎのような語句がつづいているのである。

「弁茲清濁、使如涇渭、朱丹既定、使夫「懷鼠知慚、譬斯袁紹、畏見子將、論茲月旦、類彼汝南。」雌黄有別、濫竽自恥。」同彼盜牛、遙羞王烈。

そして才能の清濁を涇渭のようにはっきり弁別し、人物の評論をあの汝南の月旦のようにやってみたい。朱色がさだまれば「紫色もはつきりするので」才の優劣もきまる。「そのように優劣を明確にして」エセ詩人たちにおそれいらせ、へボ詩人たちを恥じいらせてやりたいのだ。そうすれば袁紹が許劭にみられるのをおそれ、牛泥棒が王烈に罪をせられるのを恥じるがごとくになるだろう。

ここで蕭綱は、建康の文壇で我が世の春を謳歌している連中に、はげしい非難のことはなげつけている。「エセ詩人たちにおそれいらせ、へボ詩人たちを恥じいらせてやりたい」。ここにみえるのは、温雅な太子どころか、きわめてアグレッシヴな文壇指導者である。曹丕を模した蕭綱は、かく自己を戦闘的な文壇指導者に比擬し

ているのであり、こうしたイメージは兄の蕭統には希薄だったものである。

そういえば、右で紹介した『法宝聯璧』の編纂も、蕭綱が臣下に命じた大規模な文化事業であり、やはり「皇覽」の編纂をリードした曹丕に類していて「文壇の指導者イメージを増強させるものである。くわえて、あの著名な『玉台新詠』の編纂においても、

梁簡文帝為太子、好作艷詩。境內化之、浸以成俗、謂之宮體。晚年改作、追之不及。乃令徐陵撰玉台集、以大其體。(劉勰『大唐新語』公直篇)

梁簡文帝(蕭綱)が太子だったとき、よく艷詩をつくっていた。これに周辺が影響されて、しだいに艷詩が世間にひろまっていき、「宮體」と称するようになった。簡文帝は晩年にこれを改作しようとしたが、うまくいかなかった。そこで徐陵に命じて『玉台新詠』を編纂させ、艷詩の体を權威づけようとした。

という状況だったという。これによれば、宮體詩の盛行も蕭綱が主導したものであり、やはり文壇指導者としての姿だといってよからう。

かくみてくると、蕭綱には「兄蕭統よりも」文壇を指導しようという意欲がよかったようだ。これは、蕭綱が「兄の急逝によって」柵ぼた式に太子になったので、亡兄の近臣や息子たちから反発ややかみをうけやすかったことと、おそらく関係があるだろう。そうした周辺の反発ややかみを自覚すればこそ、蕭綱はよけいに文壇指導イメージを前面につちだして、「兄にまけぬ」明敏ぶりを印象つけようとしたのではあるまいか。<sup>7)</sup>

## 五、創作心理

話題がすこしそれてしまった。もとの「蕭統「文選序」中の「事出於沈思、義歸乎翰藻」二句についての議論にもどろう。本稿のテーマは、ここの「沈思」「翰藻」の両語の典故はなにか、ということだった。結論として、典故は魏の卞蘭「贄述太子賦」中の「沈思泉涌、華藻雲浮」だったろうとかんがえる。最後に、以上の議論をふまえ、なぜそうかんがえるのかを「想像もまじえつつ」あらためて説明してゆこう。

蕭統は幼時から、相似した立場にいた魏の曹丕を尊敬していた。つねに臣下と疑似的友人関係をもち、清雅な文事にふけていた曹丕こそが、自分の理想的な太子イメージだったのだ。だから蕭統は、曹丕のような太子となつて、臣下たちと風雅な詩会をたのしみたいとおもっていたし、じつさいそうした日々をすごしていた。あの曹丕が、あの「南皮の遊」でそうしたように。そして、そうした臣下が死去すると、自分のからだをもがれたかのように、哀悼のことはをかたりつづけた。あの曹丕が、あの「与呉質書」でそうしたように。

そうした蕭統にとつて、曹兄弟や七子らの建安期の詩文は、鍾愛の作品群だった。なかでも、曹丕をたたえた卞蘭「贄述太子賦」は、曰「ごろから愛読していた作品であり、「うん、曹丕をたたえたこの賦はすばらしい。まったく同感だ」と感心していた。そうしたある日、配下の劉孝綽らに命じていた『文選』の編纂が、いよいよ完了したとの報告があつた。そして孝綽らから序文の執筆を要請された。そのとき蕭統の脳裏にふと、あるアイデアがひらめいた。そうだ、この「文選序」のどこかで、以前からなじんでいたあの卞蘭賦の字句をつかってみよう。その場合は、曹丕の文学を称賛した「沈思泉涌、華藻雲浮、聴之忘味、奉読無倦」あたりの字句をつかうのが、

いちばんふさわしいだろうな。……

さらに想像の翼をひろげれば、卞蘭賦の字句をアレンジして「事出於沈思、義歸乎翰藻」二句をつづつたとき、蕭統が脳裏に浮かべていたのは、曹丕の詩文のなかでも、とくに『典論』の諸篇ではなかったか。なぜなら、卞蘭「贊述太子賦」でも、この作をとくにとりあげて、

窃見所作典論及諸賦頌、逸句爛然。

太子さまがお書きになった『典論』や賦頌の作を拝読いたしますに、秀逸な語句ががやいておられます。とたたえていたからだ。

右の「所作典論」は曹丕の議論ふう文章（典論）をさし、「諸賦頌」は文学作品をさすのだろう。ここで注目したいのは、「文選序」の「事出於」直前の二句「讚論之綜緝辞采、序述之錯比文華」（史書のなかの讚と論は辞藻をあつめ、序と述は文飾をまじえたものだ、の意）は、「詩や賦でなく」讚・論や序・述という議論の文を話題にしていたということだ。すると、まさに議論文の集積たる『典論』こそが、このあたりで想起されるにふさわしいからである。

以上、「文選序」中の「事出於沈思、義歸乎翰藻」二句の典拠、およびこの二句をつづつたときの蕭統の心理について、私なりに推理や検討をくわえてみた。ではおわりに、冒頭に提示した「若其讚論之綜緝辞采、序述之錯比文華、事出於沈思、義歸乎翰藻、故与夫篇什、雜而集之」六句について、典拠の内容をふまえた訳文を提示して、本稿をとじることにしよう。

……史書のなかの讚と論は辞藻をあつめ、序と述は文飾をまじえたものだ。それらの文章たるや、「魏の卞蘭「贊述太子賦」がたたえる曹丕『典論』中の議論文とおなじように」内容はふかい思索から出発し、表現

は華麗な美文に帰着している。されば、「詩賦などの」文学作品とならべて、これらの文章も採録してよからう。

注

(1) 本稿の内容は、以下の拙稿でも断片的に指摘してきた。ただそれらでは、別個のテーマに関連させてかるくふれた程度で、きちんと整理させた議論ではなかった。本稿では、そうした過去の断片的な指摘を整理し統合して、一篇の論文にしたててみた。本稿の内容に関心あるかたは、以前の拙稿もお読みいただければありがたい。それは、曹丕の「与呉質書」について 六朝文学との関連 (『中国中世文学研究』第二〇号 一九九九)、蕭統「文選序」札記(『中京大学文学部紀要』第四二二号 二〇〇八)、蕭統「文選序」の文章について(『中国中世文学研究』第五三三号 二〇〇八)、曹丕「典論論文」の文章について(『中京大学文学部紀要』第四五二二号 二〇一一)、蕭綱「与湘東王書」の文章について(『中京大学文学部紀要』第五〇一 号 二〇一五)——の諸論である。

(2) 蕭統「文選序」中でいう讚・論と序・述とは、具体的には「文選」巻四十九と五十に収録されている十三篇の史論関係の文章をさす。これらの文章は現在からみても力作がおおく、たしかに「沈思」と「翰藻」を兼備した文学作品だといつてよからう。ちなみに、こうした史論関係の文の文学的価値をみぬいたのは、范曄や沈約あたりだろう。そうしたことに ついては、拙稿「沈約宋書謝靈運伝論の文章について」(『中京大学文学部紀要』第四六 一 号 二〇一一)を参照。

(3) 中国で、「文選序」中の「事出於沈思、義歸乎翰藻」二句への研究がないわけではない。だが、中国における二句への研究は、朱自清の論文「文選序事出於沈思義歸乎翰藻説」以来の伝統なのだろうか、関心はもっぱら二句中の「事」「義」の字義説明にむかっていて、「沈思」「翰藻」の両語に言及することははなはだすくない。たとえば、楊明「事出於沈思、義歸乎翰藻解」(『文選学新論』所収 中州古籍出版社 一九九七)や呉曉峰「文選序事出於沈思、義歸乎翰藻新解」(『第八届文選学国際学術研討会論文集』所収 広陵書社 二〇一〇)がその典型のだが、二句を論文の標題にかかっている。

も、実質は「事」「義」の意味を検討することが中心になっている。

- (4) この賦は、嚴可均『全三国文』巻三十が「贊述太子賦并上賦表」と名づけるように、嚴密に言えば、序文(散文)と賦本体(韻文)のふたつの部分からできている(序文と賦本体をあわせると百三十七句)。序文はたんなるまえがきでなく、現存するがぎりでは賦の本体よりもながい八十二句の力作である。右にあげた「伏惟太子」以下も、じつは賦本体でなく、この序文の冒頭なのである。この序文は、『芸文類聚』巻十六儲宮部「とこく」一部が「初学記」巻十に「魏下蘭贊述太子表」として引用されている。この巻十六には、また韻文の賦本体が「序文ときりはなした形で」、「超古人之遐迹」云々と収録されている。この本体はいかにも賦らしく、「助」の六字句が三十二句にわたってつづいている。ところが「非臣下之敢虚」句までくると、なぜか「乃作頌曰」という句がきて、「明明太子」云々と四言韻文が二十二句つづき、一篇をおえるのである。しからは、この「頌」なる四字句は、賦の末尾にくる「乱に曰く」に相当するものと解すべきだろう。以上の「賦本体(六字句) + 頌(四字句)」は、巻十六では「贊述太子賦」と名づけられている。

- (5) 下蘭賦中の二語の用例は、PC上での電子文献の検索によってしりえたものである(また兪紹初『昭明太子集校注』百八十三頁も指摘している)。その電子検索では、「沈思」「翰藻」の二語をそなえた文章として、もう一例、「陸雲寒蟬賦」聊振思于翰藻、闕令問以長存。

思索を華麗な美文で表現し、名声をあげて永久にたもつ。

という用例がでてきた。この陸雲賦と下蘭賦の二例、いずれも字に若干の出入りはあるものの、二語が「文選序」とおなじく、近接して使用されているのが注目される。これからすると、当時の人びとは「思」と「藻」とを、対語ふうに理解していたようだ。

- (6) 拙稿「曹丕の与呉質書について 六朝文学との関連」(前出)、佐伯雅宣「梁代の侍宴詩について」(『日本中国学会報』第五四集 二〇〇二)など。

- (7) 蕭統も『文選』を編纂している。しかし彼の「文選序」では、文壇指導者のイメージを刻印しようとしていない。むしろ

る当時の多数の人びとにうけいられるよう、自分の考えをおさえ、八方美人ふうな編集方針をとっている。こうした謙虚な姿勢は、弟の蕭綱にはとほしいものだ。これを要するに、おなじ曹丕比擬であつても、あこがれが自然に吐露している蕭統と、文壇指導者イメージを意図的につえつけようとする蕭綱——という違いがあるといつてよからう。拙稿「蕭統文選序の文章について」（前出）も参照。